

盛口 満

珊瑚舎スコーレ・沖縄大学 人文学部 こと文化化学科 准教授

# 授業がすべて

毎日のように放課後の理科室で繰り広げられていた「解剖」の日々。きつかけは、授業で始めた骨格標本作りだった。

「豊かな放課後を生み出せる授業こそ、目指すべき授業の姿」  
そんな言葉が力を持つ、ゲッチョ先生と教え子たちのエピソード。

「ゲッチョ、これ何？」

顔を合わすやいなや、そう言われた。

ゲッチョというのは僕のあだ名だ。

東京から僕の住んでいる沖縄にレイコが遊びに来た。彼女は僕がかつて生物の教員をしていた埼玉の私立高校の卒業生だ。レイコが取り出したのはケータイである。そのケータイを操作すると画面が出た。画面には撮影された虫の写真が映し出される。彼女の家の近所で撮影されたものだという。ガの写真だ。太い体、三角翼の飛行機に似た翅、スズメガの仲間のセスジスズメである。

「かっこいいよね」

レイコは一般的には嫌われることが多いだろうがを、そう評した。そうかと言って、レイコが特別に虫好きかと言えば、そういうわけではない。ただ彼女は在学中、理科研究室に入り浸っていたメンバーの一人ではあった。

## 死体集めの日々

僕の勤めていた学校は「生徒たちの自主自立を重んじる」ということが、教育理念のひとつの柱であった。学校行事やクラブ活動は基本的に生徒たちが運営の主軸を担っていた。クラブは生徒たちが新しくつくろうと言いつせば、割と簡単に作ることできるしくみになっていた。しかし、僕の学校には「生物部」はなかった。僕自身、つくろうとも思わなかった。生徒たちが興味を持ったときに、自由に理科室周辺を出入りすればいい、と考えていたのだ。ただ、僕がこの学校に新卒の教員として採用されたとき、理科準備室には生き物の標本はひとつもなかったし、理科研究室に入り浸る生徒もいなかった(ちょうど学校が開設された年に着任したのだ)。

僕が大学で専攻したのは植物生態学である。しかし高校生たちは、植物などにはなかなか興味を示さない。あ



里山の哺乳類代表、タヌキ。  
人里で暮らすため、交通事故に遭うことも多い。

まりに地味なのだ。かといって昆虫はどうかと言えば、これもまた興味の対象物としては、おおむね小学生時代に卒業してしまっている。高校生たちの興味の対象は「自分」や「異性」、つまりは主に「人」にある。授業を受け持つようになつてしばらくして、高校生たちも植物や虫よりはまだ人間に近い動物や鳥には、幾分の興味を持つことがわかった。それでも学校は動物園ではない。授業のたびに生きた動物を教室内に持ち込むなんていうことは、そうできない。そもそも僕は生き物の飼育が苦手である。

幸い、僕の勤め始めた学校は「里山」と呼ばれる環境内にあつた。生き物との、いや応なしの遭遇が引き起こされる環境にあつたのだ。

生徒が振り回して遊んでいたヘビをよくよく見れば、マムシだったことがある。

体育祭で空に放つたハトが、見ている間にオオタカに狩られたこともある。

学校近辺で交通事故に遭う生き物も多かった。

「もったいない」。ひかれたタヌキが道端で転がっているのを見て、そう思った。これこそ、願ってもない教材ではないか？ やがて僕は、交通事故でひかれたタヌキや、窓ガラスにぶつかって死んだハトやらをせつせと集め始めるようになった。

「ゲッチョはなにやら死体が好きらしい」

こんな風聞が立ち始める。これは願ってもないことだった。おそらく半分はひやかしかもあつたのだろう。しかし、死体も含めて、あやしげなものが目に留まったら、僕のところを持つてくるという雰囲気、学校の中にできあがったのだ。

レイコはそんな学校の8期生であった。レイコの同級生には、タヌキからアザラシまでありとあらゆる動物を骨格標本に作り上げたミノルや、毒キノコやら毒ナマコまで何でも口にしたことのあるマキコといったツワモノがいた。こうなると今度は僕ではなく、こんな強烈な生徒が中心軸となつて、ほかの生徒たちを理科室に呼び寄せるようになる。結果、訪れる頻度は生徒によつてさまざまだが、いろいろな生徒たちで連日のように理科室かいわいは、にぎわうことになった。放課後、理科準備室で交通事故死したタヌキが煮られる風景が日常茶飯となった。

## 豊かな放課後

「タヌキ落ちてるけど、いる？」

ある日、父母から電話がかかってきた。僕の「死体好き」のうわさは、父母の間にまで浸透していた。もちろん、「いります、いります」という返事をする。

学校に届いた(タヌキ)を見て驚く。箱の中から出てきたのはタヌキではなくて、アナグマであったのだ。両者はよく似た体型の動物ではあるので、知らない人を見ると混



タヌキと混同されてしまうこともあるアナグマは、イヌ科のタヌキと異なりアナグマ科の一員。ツメが発達し、穴掘りも上手。

同してしまふだろう。タヌキに比べると、アナグマの死体を拾うチャンスはごく少ない。そのため、思わぬ届け物に喜んだ。さっそくわらわらと、半ば理科室の住人化している生徒たちも集まつてくる。彼らはアナグマの足にスタンプを押しつけ、足型を取り始めた。前日は、タヌキの解剖をしたばかり。このときに足型を取ったので、比較をしてみようというわけだ。イヌ科のタヌキの足型には4本の指が見て取れるが、イタチ科のアナグマの足型には5本の指の跡が残る。体型はよく似ていても、グループが違うことが足型から見えてくる。

「頭骨が割れているね」

〈骨取り大王〉の異名を取ったミノルが、アナグマの頭をなでながらつぶやいた。アナグマは交通事故死したものだったからだ。さらにミノルは言葉が続けた。

「でも大丈夫、くつつけるから……」

さすがの一言であるが、何だか笑ってしまった。

「職員会議が始まります」

ここで、無情にも放送が入った。アナグマの解剖は生徒たちに任せ、泣く泣く理科室を後にする。会議が終わつて理科室に戻ると、そこには見事(?)に解剖されたアナグマが待つていた。

「昨日のタヌキに比べて新鮮、新鮮。中身もキレイだったよ」

胃の中からは、カナブンやミミズ、サクラの種などが出てきたと報告を受ける。

「ねえ、肉食べちゃだめ？」

ここで、今度はマキコが言った。

これもさすがの一言である(タヌキに比べるとアナグマはおいしいそうだけれど)。しかしここは苦笑い。試食はおあずけにした。

「最終のスクールバスが出ます」という放送を聞きつつ、あわてて解剖の後始末。その翌日の放課後には、今度は

ネコにかまれたモグラが持ち込まれ……。

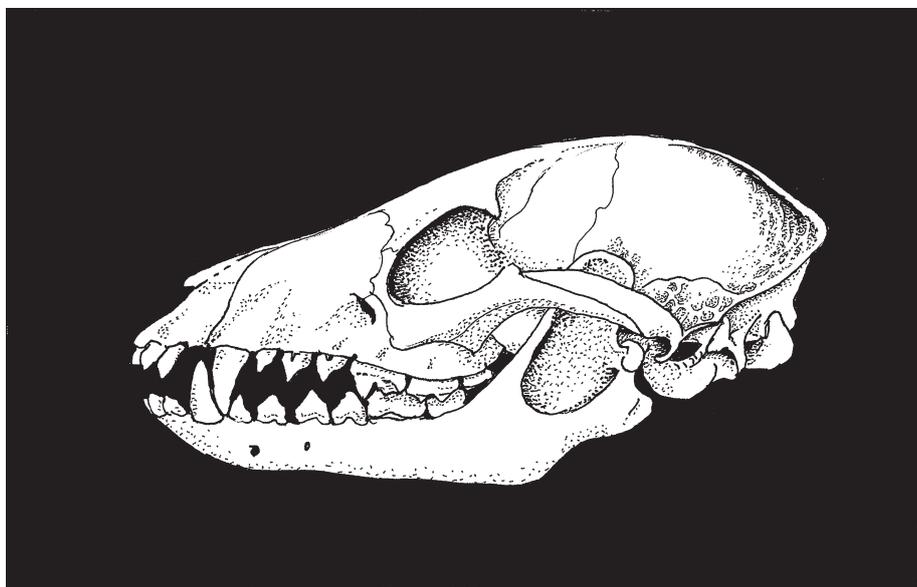
「豊かな」放課後であったと思う。レイコはこんな放課後仲間なのである。卒業して十数年経っても、会っていきなりガの写真を見せつけるのは、こうした過去があるからだ。しかし、である。放課後は、授業があるからあるものなのだ。

生徒たちは学びたがっている

僕のいた学校は、校則はほとんど無きに等しかった。「暴力はだめ」「器物破損はだめ」というごく当たり前のことと、近隣事情から「バイク通学禁止」というものが覚えている限りの校則である。それだけではない。学校といえはおなじみの定期テストもなかった。通知表も数字ではなく、個人個人に文章で評価を書き綴ったものを手渡ししくみであった。点数で生徒たちを机に縛りつけるということもよしとしない校風があったのである。

「本質的に生徒たちは学びたがっており、質の高い授業をすれば、校則などなくとも生徒たちは自発的に学ぶ」これも僕らの学校の教育理念のひとつだ。端的に「授業がすべて」という言い方もよくなされた。おかげで、新米教員は泣かされた。授業中うるさいのも、生徒の出席率が悪いのも、考えようによっては授業の中身が悪いから……ということになるからだ(実際、新米教員の授業の中身は惨憺たるものであったと思うが)。いまだに授業づくりは四苦八苦の連続だけれど、決して手は抜けないものであるという思いは、この新米教員時代に染みついたものだ。

授業の中身が不十分である。このことは自分でもわかつていた。だから教材探しには躍起になった。それが先に書いた骨格標本作りに結びついている。生徒たちが振り向いてくれる教材を探して、たどりついたもののひとつが骨であった。最初、教材づくりとして始まった骨格標本作



タヌキの頭骨 115mm

りが解剖の授業となり、放課後の生徒たちの自主活動(クラブではないので、「ホネホネ団」などと自称していた)と広がりを見せた。つまり授業づくりが「豊かな放課後」までつくり出していたわけだ。まさに「授業がすべて」であったということだろう。

今、僕は初等教育養成課程のある大学で、教員としての日々を送っている。「授業がすべて」というメッセージを学生たちに伝えたい、と思う。これが簡単なようで難しい。学生たちは授業にはまじめに取り組むが、その目標は単位が取れるかどうかであり、それ以外ではないのだ。これは現代社会の風潮も若干、関係しているように思える。

最近資格社会だ。実にさまざまな資格が存在する。大学でも「どんな資格が取れるのか」ということが重要な目標とされている。「わかりやすさ」も重視されている。何をしたらどうなるのか。それははっきりとさせる「説明責任」という言葉もよく耳にする。大学でも点数評価の導入についての議論が盛んになってきている。これらはすべて決められた枠内のことをいかに確実に獲得するかという、ひとつの流れに思えてしかたがない。

でも、こと教育に関しては、こうした風潮になじまない面も多いのでは? という違和感を持ち続けている。授業というものは、その場限りで終わらないから面白いのだ。何が何に波及していくかわからない奥の深さが、授業にはあると思うのだ。例えば、豊かな放課後を生み出せる授業こそが、目指す授業の姿なのではないかと僕は思う。

## 放課後が指針

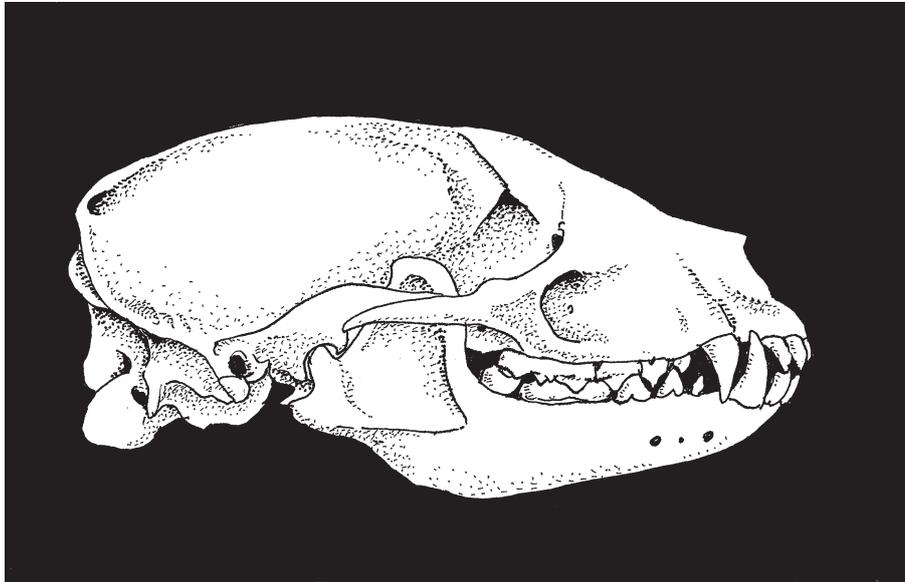
当時の放課後仲間、十数年が経って、今それぞれの場にいる。僕は勤めていた高校を退職し、沖繩に移住。その後、大学の教員として2年目の日々を送っている。レイコは東京で働いている。彼女の仕事は特に生き物系との

関わりはない。それでも、ふとした折に顔を合わせたりする。ミノルは卒業後、ドイツで標本作成の専門技術を学び、現地の博物館に就職した。マキコは半ば独学で「骨」を究め、大阪の博物館で標本作成に関わる仕事をしている。マキコの場合、地元の小生たちを博物館に集め、「なにわホネホネ団」なる集団までつくり上げている。博物館に集められる動物の死体を、標本として作り上げるための有志の集まりである。全国の骨好きを集めて……いや、ドイツで活躍しているミノルも含めて、「骨サミット」なるものを開催しようとしたくらいでもないらしい。「豊かな放課後」は、さらなるつながりと広がりを見せつつある。やはり「授業がすべて」だ。

大学での授業のひとつ。学生たちとバスに乗って、魚市場に出かけた。5人一組ほどのグループごとに、1000円を渡し、好きな魚を買い求めさせた。ただし条件をひとつだけつける。内臓も抜いていない丸ごとの状態のものに限る、という条件だ。

レンコダイ、ハタハタ、マダイ、タカサゴ、グルクンなどの魚とともに、大学の理科実験室へ戻る。まず買い求めた魚を、進化の順に並べてみる。外見の観察の後は、解体と料理。魚を三枚におろすのに大騒ぎだ。

せっかくなので、理科室の冷凍庫から秘蔵品を取り出した。埼玉の私立高校の教え子の一人は、小笠原で漁師をしている。その彼が送ってくれたメバチマグロの胃袋だ。パンパンに膨れた胃袋を切ると、中からは得体の知れない塊が出てきた。それをほぐすと、机の周囲に陣取った学生ばかりでなく、僕の口からも、「おーっ」という声が漏れた。メバチマグロの胃袋から出てきたのは、見たことのない姿のイカに加え、銀色に輝く深海魚だったのだ。マグロの中でもメバチマグロは、深いところまで潜って採餌する魚であったのだ。メバチマグロの胃から出てきた深海魚は、ト



アナグマ頭骨 105mm タヌキとはだいぶ形が異なる。

ガリムネエソだった。そのトガリムネエソの胃の中から、また奇怪な顔つきの小魚が姿を現す。

「食物連鎖だ……」

見ていた学生が声を上げる。

「もっというんなやつ。胃の中身、見てみたいね」

そんな声さえ上がった。授業の中で、これだけ積極的な学生たちを初めて見た。

それでも僕の大学の理科室には、まだ授業外の時間にうろつく学生たちの姿はない。僕にとって新たな場での授業実践はまだまだこれからののだ。かつて体験した放課後の日々が、今の僕の授業づくりの指針となっている。

#### もりぐち みつる

1962年、千葉県生まれ。千葉大学理学部生物学科卒業後、自由の森学園中・高等学校の理科教諭。2000年より沖縄に移り住み、フリースクール「珊瑚舎スコーレ」の活動等に携わる。2007年より沖縄大学人文学部こども文化学科准教授。『なんでこんな生物がいるのーゲッチョ先生の森の学校』（日経サイエンス社）、『骨の学校』（木魂社）、『ほくは貝の夢を見る』（アリス館）、『わっ、ゴキブリだ!』『ゲッチョ昆虫記ー新種はこうして見つけよう』（共にどうぶつ社）など著書多数。